

「を VN だ」構文の出現頻度—Google 検索による再調査—

佐藤 豊

[要 旨]

本論文においては、動名詞 (Verbal Noun, VN) がコンピュータと結合し、動名詞の項にヲ格を付与している構文 (「を VN だ」構文) が、実際にどのぐらい使用されているかを、Google 検索によって確認した。これは佐藤 (2011) の再調査である。ただし、本論文は、調査方法において佐藤 (2011) とは異なり、Google 検索の際に、検索オプションを操作して「語順も含め完全一致」するテキストを選択し、はじめの 20 件に当該形式が見つけれられた場合は、使用されていると見なし、はじめの 20 件に当該形式が見つけれられない場合は、使用されていないと見なした。468 語の動名詞のサンプルについてこの操作を行ったところ、「を VN だ」の形式は、468 語中の 392 語 (83.7%) に関して当該形式が使用されていることが認められた。同時に調査した「を VN 中」の形式に関しては、486 語中の 408 語 (87.2%) が使用されていることが認められた。どちらも 8 割を超える動名詞に使われていることが確認されたことから、「を VN だ」という形式がその使用において決して特殊で稀有用法ではないことを示した。

[キーワード]

だ、軽動詞、動名詞、する、中

1. はじめに

日本語には、「する」(軽動詞 / light verb, Grimshaw & Mester 1988) とともに複合動詞 (サ変動詞) を派生させる動名詞 (Verbal Noun, Martin 1975; 影山 1993) と呼ばれる語が存在する。たとえば、例文 (1) に示した「練習」はその動名詞のひとつである。

(1) 太郎がピアノを練習する。

(1) にあるように、「練習する」という派生形は、ひとつの動詞と同じように振る舞い、動詞格 (典型的に動詞とともに共起するヲ格等の格, Iida 1987) を取ることが可能である。「する」と結合する動名詞については、今までに様々な研究がなされてきた (Grimshaw & Mester 1988; Hasegawa 1991; Hoshi 1994; Matsumoto 1996; Miyamoto 1999; Ohara 2000; Ohta 1994; Saito & Hoshi 2000; Sato 1993b; Takahashi 2000; Terada 1990; 影山 1993 等)。一方、動名詞にコンピュータが後続して、動名詞 + 「する」の場合と同じように、ヲ格をとる形式 (たとえば、例文 (2) における「練習だ」) についてはまだ十分な研究が行われていない。

(2) 太郎がピアノを練習だ。

その理由は様々あると思われるが、一番の理由は(2)のような構文が、完全に文法的なものであるかどうかについて、疑問の余地があるからではないかと思われる。このように文法的に周延的な構文を調べる意義は、この構文における格付与のメカニズムの特異性から来る。この構文の格付与のメカニズムには、従来の文法理論によっては、十分に説明できない特性があると思われ、その点からもこの構文が実際の使用において特殊で稀有な構文ではないことを示すことは、新たな言語学的探究の道につながるのではないかと思われる。その格付与メカニズムの特異性とは、本構文においてヲ格が付与されるということである。以下、本節においては、(2)におけるような構文におけるヲ格付与の特異性について論じ、本論文の構成を示す。なお、以後、(2)のように動名詞にコピュラ（その様々な活用形を含む）が後接する構文を「VNダ構文」と呼び、(1)のように動名詞に「する」（その様々な活用形を含む）が後接する構文を「VNスル構文」と呼ぶ。

通常、日本語学においては、VNダ構文は名詞述語文として扱われている（高橋 1984）。しかし、動名詞を名詞であると解釈した場合⁽¹⁾、動詞の介在なしに名詞述語文においてヲ格が付与されるということはたいへん特異なことであると思われる。議論を明確にするために、本論文では、名詞述語文とは(3)にある構造を有していると考えられる。

(3) ... [NP ... N] ダ

つまり、名詞述語文とは名詞句にコピュラが後続して、述語を形成している構文だと理解する。このコピュラは、(3)にあるような「だ」という形式のみならず様々な活用形で現れる可能性があるし、音形のないゼロのコピュラとして現れる可能性もある。本論文における名詞述語文内のヲ格付与に関する議論は、上のN-ダという述語の項がヲ格で現れる可能性があるかどうかということをめぐるものである。（ただし、コピュラはあくまでも形式的な要素であることから、実質的な意味を持つNが項構造を持ち、その項が、コピュラが後接した場合に、ヲ格として現れるかどうかということでもある。Nの項か、あるいは、N-ダの項かという点については以下特に区別をしない。）既に提示したVNダ構文の例(2)を使って説明すると、(2)において、「練習だ」という述語は、ヲ格の項として「ピアノ」をとっていることになる。それは、動名詞「練習」が項構造として、動作主と対象の項をとると規定しているからであり、その対象の項が、ダの後接によりヲ格として現れることが可能になったということになる。では、はたして、このような意味において、他の名詞述語文においても、ヲ格の項をとることができるであろうか。ちなみに、もし、動名詞に「中」が付いた形式を複合名詞（つまりN）と考えた場合は、(4)のように、「VN中」が名詞句の主要部として現れた場合も、ヲ格の項が可能であるが、動名詞以外の名詞について、(3)の構造におけるN-ダが、その項としてヲ格をとるであろうか。

(4) ジョンは原稿を執筆中だ。（杉岡 2009 の例文（30a）、p.93）

くりかえしになるが、ここでの議論は、あくまでも、述語名詞句の主要部である名詞（+ダ）の項がヲ格として現れるかどうかを問題としており、動詞が介在してヲ格を可能にしている場合は除く。(5) (6)にあるヲ格の項「人を」は、動詞「襲う」の項であり、この

動詞のおかげでヲ格を得ていると言える。「人を」は (5) (6) の述語名詞句の主要部である実質的な名詞「熊」(+ダ)、あるいは形式的な名詞「つもり」(+ダ) の項ではない。また、敬語の形式である (7) は、Ivana & Sakai (2007) の議論に従い、「待つ (mat-)」という動詞が機能範疇により名詞化されて派生された構造であると考え、(7) のヲ格の項「あなたを」は、この動詞により出現可能となったと考える。このことから、本論文で問題となっている名詞述語文におけるヲ格とは異なる。

- (5) これは $[_{NP}$ [人を襲う] 熊] です。
- (6) あいつは $[_{NP}$ [人を襲う] つもり] だ。
- (7) 山田先生は、さっきから、あなたをお待ちです。

動詞あるいは動名詞が介在している構文以外の名詞述語文において、ガ格以外の格が現れる場合は、(8) (9) のようなものが考えられる。

- (8) 花子は太郎と正反対だ。
- (9) 太郎はその意見に不賛成だ。

「正反対」も「不賛成」も「する」とは結合することができず、動名詞ではなく、それぞれ項と思われる「(太郎) と」、「(その意見) に」という格で現れている。しかし、これらはヲ格で現れることはない。

形容動詞 (あるいは、形容名詞) 「好き」のような語を、名詞と想定した場合、「太郎は花子が好きだ」も名詞述語文になると思われるが、ガ格目的語ではなく、ヲ格目的語を使って、「太郎は花子が好きだ」とした場合は、それが状態を表すことから、その文の適格性が非常に低くなる (久野 1973)。規範的には、「好きだ」の対象項はガ格目的語として現れるべきものであり、その形「太郎は花子が好きだ」のほうが適格性が高い。一方、(10) が示すように、(2) のような VN ダ構文においては、ヲ格をガ格に変えることはできない。つまり、他動詞的動名詞の (能動態における) 対象項は、本来ヲ格として現れるべき項であるということになり、「好きだ」の場合とは異なる。

- (10) * 太郎がピアノが練習だ。

以上、(VN ダ構文を除く) 名詞述語文においては、典型的な動詞格であるヲ格が付与されず、この意味で VN ダ構文は特異であることを述べた。このような特異性のある構文が実際にどのように使われているかを調査することは言語学的に意味があることと思われる。佐藤 (2011) は、実験的に 472 語の動名詞について Google 調査を行い、その結果、4 分の 1 に当たる 125 語の動名詞について、(2) のような、ヲ格をとる VN ダ構文の使用を確認し、その用法がある程度存在することを示した。しかし、佐藤 (2011) による Google 検索調査は、「検索オプション」の操作なしに行われたもので、実際にネット上でどのぐらいの出現数を示すかについて正確な数値を伝えていない可能性がある。そこで、本稿においては、「検索オプション」に操作を行い当該形式の検索を行った。その結果、佐藤 (2011) とは全く異

なる数値が得られたので、その調査結果を報告する。

以下、2節においてはVNダ構文に関する先行研究を紹介し、3節においては調査の手順を述べ、4節においてはその結果を提示し、考察を加える。

2. 先行研究

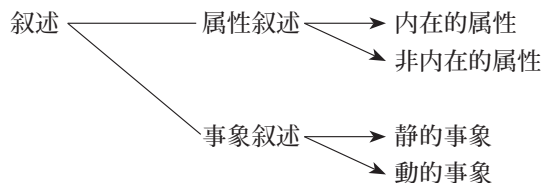
本節においては、当該構文がどのような構文であるかについてももう少し限定するために、先行研究を通して、VNダ構文の意味的および統語的な特徴に焦点を当て、他の名詞述語文とどのように異なるかを示す。

2.1 VNダ構文の事象のタイプ

VNダ構文は、「これは本だ」というような状態を示す名詞述語文と構文を同じくしているように見えるが、意味的には、対応するVNスル構文に近似している。たとえば、(2)のVNダ構文は、アスペクト・テンス・モダリティ等の点を除いて、(1)のVNスル構文と同じような事象を表している。すなわち、(1)においても、(2)においても、「練習」という活動において、「太郎」の指示物が動作主として参加し、「ピアノ」の指示物が対象として参加するという事象を表している。VNダ構文(2)に対応するVNスル構文(1)は動詞文であり、このことから、VNダ構文は名詞述語文でありながら、意味的には、動詞文と同じような事象を表すことができるということになる。この点に関して、仁田(1980、p.169)は、VNダ構文を「動詞文に近似している」としており、高橋(1984)は「動作づけ」の文である、すなわち、「述語が主語のさししめすものごとの運動をさししめしているもの」(pp.20-21)であるとしている。工藤(2002、p.51)は、「一時的現象」で「運動」を表す名詞述語文として「出発だ」「完成だ」「入院だ」「開幕だ」を挙げている。また、益岡・田窪(1982)は、「研究」「旅行」等が「形式動詞『する』」と結合して「借用動詞」を派生するが(p.19)、「する」の代わりに判定詞(コピュラ)が接続し述語を派生することもある(p.28)として、VNスル構文とVNダ構文の関係を指摘した。

益岡(2008)は、事象のタイプを(11)のように分類している。すなわち、叙述(Predication)のタイプが、「属性叙述(Property Predication)」と「事象叙述(Event Predication)」にわけられ、さらに、属性叙述は、「内在的属性」と「非内在的属性」に分かれ(p.5)、事象叙述は、「動的なイベントを表す『動的事象』」と状態的なイベントを表す『静的事象』(p.4)に分けられている(益岡2008、pp.3-5)。この分類において、ヲ格をとるVNダ構文は一般の名詞述語文とは異なり、下の分類における動的事象を表すと思われる。

(11) 益岡(2008)による事象のタイプ



益岡（2000）は、本構文が単に意味的な事象タイプにおいて他の名詞述語文と異なるということを指摘しただけではなく、主題の有無という統語的な特性と関連づけられる点においても特異であることを指摘している。益岡（2008）によると、属性叙述は基本的に有題文の形で表され、事象叙述は第一次的には無題文の形で表されて、「属性叙述は対象が有する属性を述べるものであり…」(p.4) それに対して、事象叙述は「特定の時空間に実現するという性格」を持つ (p.5) ことになる。このことから、VN 構文が動的な事象を表すのであるならば、無題形式で動的な出来事を表すことができ、その点において、他の名詞述語文と異なってくるのが予想される。

益岡（2000、p.46）は、名詞述語文には「内在的属性を表す場合、状態を表す場合、動作を表す場合がある」と述べている。彼は、名詞述語文として (12) から (15) にあるようなものを挙げている。(12) が内在的属性を表す名詞述語文の例で、(13) (14) が「状態」を表す場合である。(13) は非内在的属性の表現であり、(14) は、「花子が病気だという事象（静的な事象）の存在を伝達する表現」（益岡 2000、p.47）として現れた場合であるとしている。さらに、(15) は、(16) と同じように、「動作」を表す事象叙述であるとしている（益岡 2000、p.47）。すなわち、(15) は動的な事象を表すと解釈される。

- (12) 彼は作家だ。(益岡 2000 の (38)、p.46)
- (13) 花子は病気だ。(益岡 2000 の (44)、p.47)
- (14) 花子が病気だ。(益岡 2000 の (46)、p.47)
- (15) 田中さんが到着だ。(益岡 2000 の (48)、p.47)
- (16) 田中さんが到着した。(益岡 2000 の (51)、p.47)

上において、(15) のガ格は「動作の主体を表す補足語の働き」をしており、無題の表現が可能な場合である（益岡 2000、p.47）。さらに、益岡（2000）は、(15) を、動詞格ではなく名詞格（日本語においては具体的には、ノ格、Iida (1987)）が付与された項と共起している構文と比較している。

益岡（2000、p.47）は、(17) にある「ピアノの練習」が名詞述語文に現れる場合、(18) にあるような VN スル構文とは異なり、(19) にあるように、無題としては現れにくいと指摘している。

- (17) 娘はこれからピアノの練習だ。(益岡 2000 の (50)、p.47)
- (18) 娘がこれからピアノを練習する。(益岡 2000 の (54)、p.47)
- (19) ?娘がこれからピアノの練習だ。(益岡 2000 の (53)、p.47、益岡による判断)

益岡（2000、p.47）が (19) の文を「無題表現が成り立ちにくい」とする理由は、それ以上、述べられておらず、ここでの議論では明らかではないが、彼がこの議論の後 (p.48) で論じている「有題文」と「無題文」をわける根拠を考えあわせると、(19) は「他の誰でもなく、娘が」というような総記（久野 1973）の解釈としては、可能であろうが、久野の言う中立叙述としては生起しにくいということだろうと思われる。益岡（2000、p.48）は、「益岡（1987）においては、属性叙述を表す文は一般に (57) [= (20)] のような有題文となり、

無題文の形をとった (58) [= (21)] の表現では、『他の誰でもなく、鈴木先生が』といった意味を表すということを指摘した」と述べている。

(20) 鈴木先生は生徒に厳しい。(益岡 2000 の (57)、p.48)

(21) 鈴木先生が生徒に厳しい。(益岡 2000 の (58)、p.48)

(19) の「娘が」に関しては、「他の誰でもなく、娘が」の解釈が強く、そのような総記のコンテクストなしには解釈しにくいために、適正文として成り立ちにくいと述べているのだろうと思われる。

すなわち、VN ダ構文がノ格により修飾されているか否か（前者は (19) の場合であり、後者は (15) の場合）により、表す事象が異なってくるということである。ノ格による修飾がない場合（(15) の場合）は、無題の動的事象を表すことができ、他の名詞述語文とは異なる。一方、VN ダ構文であってもノ格によって修飾される場合は、有題文が基準であり、動的事象を表すことができないということだと解釈される。⁽²⁾

以上、本小節においては、先行研究において VN ダ構文が、他の名詞述語文と異なり、動的事象を表すことができることを述べた。特に、益岡 (2000) により、そのような（無題文の）動的事象を表すことができるのは、ノ格により修飾がない場合であることが指摘された。

2.2 VN ダ構文と共起する格

前小節において、先行研究において、VN ダ構文が動的事象を示す特性を持つと言われていることを示したが、本構文がヲ格をとるかどうかということに関しては、どのように扱われているのであろうか。以下には、VN ダ構文と共起する（ガ格以外の）格について論じられている論文を紹介する。

奥津 (1976, p.26) は、(22) のように、到達点を示すへ格を取る例文を挙げている（同じような文が、Matsumoto 1996, p. 81, footnote 10; Sells 1996, p. 617, footnote 10; Iwasaki 1999, p. 175, footnote 11 でも扱われている）。

(22) 来週は部長と北海道へ出張だ。(奥津 1976 の (26)、p.26)

大島 (2010, p. 91) は、到達点のニ格を取る例文（例文 (23)）を挙げており、仁田 (1980, p.168) は場所格のデ格を取る VN ダ文（例文 (24)）を挙げている。

(23) あ、たった今、船が港に接岸です！（大島 2010 の (16a)、p.91)

(24) 明日からバレーボール部は学校で合宿です。(仁田 1980 の (55)、p.168)

以上のように、ヲ格以外の格をとる VN ダ構文は指摘されていたが、ヲ格をもった VN ダ構文は指摘されていなかった、それに対して、Sato (2008) および鈴木 (2010) は、ヲ格をともなった (25) のような VN ダ構文を提示している。⁽³⁾

(25) タレント橋下徹知事が、全国知事会を批判だそうな。

(www.ops.dti.ne.jp/~makino2/0905.html, 2011年8月22日)

しかし、久保田(2010)はこのようなヲ格をとるVNダ構文の扱いについて注意を喚起している。久保田(2010)の議論に従えば、特殊な文体を除いては、(25)のようにヲ格を取るVNダ構文が存在するかどうか疑われるということだ。久保田(2010, p.108)は、「[行為者]としての読みが強い主語は、『VNダ』文の主語にはなり難い」としている。すなわち、(26)のような「行為者」が「主語」としては現れるVNダ文は適格性に欠けると判断し、そのような文は、(27)のように元の目的語が「[経験者]的」な「主語」として現れるとしている(p.108)。(27)の「#」マークは意味的に不適格であることを示す。(26)(27)に関する文法判断はいずれも久保田2010によるものである。

(26) ?日本サッカー協会は次の全国大会を新潟で開催です。(久保田(2010)の(12a)、久保田の判断)

(27) 次の全国大会は新潟で開催 {です/されます/#する}。(久保田(2010)の(11a)、久保田の判断)

(27)にある「次の全国大会」は主題として現れており、主語かどうか定かではないし、もし、そうであるならば、その意味役割は、「経験者的」というよりは、対象あるいは被動作主として解釈されるものである。久保田の議論の意図は明確ではない。しかし、本来「行為者」主語を持つ他動詞的動名詞(「開催」)について、(26)のように能動態としては非文法的な文に近く、(27)にあるように、受動態(「されます」)でなら文法的な文になると議論することは、久保田の言う「経験者」(あるいは、対象/被動作主の項「次の大会」)は主格としてのみ現れ、ヲ格としては現れないということになる。(ただし、以下に述べる特殊な文体においては他動詞的動名詞の対象/被動作主が目的語として現れると、久保田2010は主張していると思われる。)

久保田(2010)は、ヲ格をとるVN構文を含む鈴木(2010)において論じられた構文について、それらが特定の文体において現れるものである(「ニュース報道で特徴的に観察される見出し的な表現」、p.105)として、彼の分析から排除している。確かに、鈴木(2010)自身も、彼女が論じるVN構文は、典型的にニュース報道においてキャスターが新しいニュースを紹介するときに特徴的に使われる見出し的な表現であるとしている。しかし、久保田(2010)が扱う例文と、鈴木(2010)が扱う例文の明確な違いは明らかにはされていない。久保田が(2010)が扱う文、たとえば(27)のVNダ構文「次の全国大会は新潟で開催です。」も、鈴木が扱う用例と同じような効果を持ち、新たなニュースを導入するニュースキャスターに使われてもおかしくないものである。鈴木(2010)は、あくまでも「特徴的に」ニュースで見出し的に使われると言ったものであり、彼女は他の文体におけるVNダ構文の可能性を示唆している。このことから、本論文においては、ニュース報道における見出し的な表現であるか否かについて、分けることはしない。

以上のように、ヲ格以外の格をとるVNダ構文は先行研究に認められているところであるが、ヲ格をとるVNダ構文の存在を指摘する先行研究は限られている。このことから、

次節で示すように、実際の言語使用においてどの程度ヲ格をとる VN ダ構文が存在するかを Google 検索により検証した。

3. 調査の手順

本論文は佐藤 (2011) の再調査を報告するものであり、調査の手順は、基本的には佐藤 (2011) と同じである。しかし、後で詳しく述べるように全く同じではなく、検索方法において「検索オプション」に操作を加えることにより、より正確な数を探す方法を試みた。動名詞のサンプルを作成するために、相澤 (1993) が挙げている動名詞 1,080 項目を使用した。相澤 (1993) は、『日本語教育のための基本語彙調査』(国立国語研究所 1984) において選定された 6880 項目 (6060 語) (基本語六千) から、二字漢字、外来語、和語に「する」が接続した「複合サ変動詞」(一部複合サ変動詞相当と見なされた一字漢字のサ変動詞も含まれている) 1,080 項目を選出している (相澤 1993)。相澤 (1993) が選出したリスト中から、彼が参照した 6 つの辞典すべてにおいて「する」と接続する、つまり、動名詞であると認められるものを選び出し、さらに、ヲ格動詞との共起を調べるために、「する」と結合した場合、他動詞になる動名詞を選び出した。すなわち、相澤 (1993) の扱った 1,080 項目の動名詞のうち、以下の基準を満たす動名詞を取り出した。

- (28) a. 6 つの辞典 (『大辞林』『学研国語大辞典 (第 2 版)』『新明解国語辞典 (第 4 版)』『三省堂国語辞典 (第 4 版)』『岩波国語辞典 (第 4 版)』『例解国語辞典 (第 3 版)』) 全てがサ変動詞として扱っているもの
 b. 相澤 (1993) が動名詞に軽動詞「する」が接続した場合にヲ格を取ると認めたもの

(28) a,b に該当する動名詞は、588 項目あった。そのうち、同形の動名詞であっても『分類語彙表』(1964) の類別が複数の類別にまたがっていることから、複数の項目になっているものが多くあったが、同形は全て 1 語としてまとめた結果、535 語の動名詞を得ることができた。

さらに、佐藤 (2011) でも行ったように、(29) にある「拡張」のように、自動詞・他動詞同形の動名詞は、検索から排除した。この結果、表 1 のような内訳となった。

- (29) a. 領土が拡張する
 b. 領土を拡張する

表 1. 動名詞の語数

他動詞のみの動名詞	468
自他同形の動名詞	67
合計	535

なお、今回、検索の対象とした語数 468 は、佐藤 (2011) より 4 語少ない、これは、佐藤 (2011) が扱ったサンプル (472 語) のうち 4 語が自他同形であることが判明したからである。

上の動名詞のうち、「する」と複合動詞を作った際、他動詞のみの形になるもの 468 語を対

象に調査を行った。調査期間は、2011年9月8日より10月11日までであり、Google 検索オプションの「語順も含め完全一致」を選び、468語の動名詞の「をVNだ」「をVN中」の形式の存在の有無を、検索された項目の最初の20件の中から選び出した。(検索された件数が20件より少ない場合は、それ以下の数の中から探し、場合によっては、何も検索されないこともあった。)20件の中から少なくとも1件のテキスト中に当該形式があれば、当該形式は存在するとし、20件中に1件もない場合に、当該形式は存在しないと判断した。今回は、「語順も含めた完全一致」の検索オプションを選ぶことによって、完全に一致していなくても検索される項目を排除することができ、佐藤(2011)より多くのVNダ構文を検索することに成功した。

なお、佐藤(2011)でも行ったように、「をVN中」という形式についても調査を行った。それは、(4)に示した「をVN中」という形式を持つ構文については、過去において多く研究がなされており(Hasegawa 1991; Hoshi 1994; Iida 1987; Iwasaki 1999; Manning 1993; Matsumoto 1996; Miyagawa 1991; Miyamoto 1999; Ohara 2000; Ohta 1994; Sato 1993b; Shibatani & Kageyama 1988; Takahashi 2000; 影山 1993; 杉岡 2009等)、十分にその存在が認められていることから、「をVN中」の構文の出現数と「をVNだ」の構文の出現数を比べることが目的であった。

(4) ジョンは原稿を執筆中だ。(杉岡 2009 の例文 (30a)、p.93)

以上のように調査を行ったが、たとえその用法が実際に検索されても、(30)のように、ヲ格の項目が当該動名詞の対象項(あるいは、場所を表すヲ格)と認められない場合は排除した。(30)においては、「数学を暗記する」という意図で、「数学を暗記だ」が使われているわけではなく、「数学ということが、暗記することである」と、解釈できるので、「数学を」は「暗記」という動作の対象とは認められない。

(30) 数学を暗記だというなら大学も似たようなものだよ。
(kotonoha.cc/no/194671、2010年3月13日)

また、筆者が判断して日本語として適正とは認められないものや、意味が理解できないものも排除した。

4. 結果と考察

以上に示した調査手順により、Google 検索を行ったところ、表2にあるように、佐藤(2011)における検索数より、より多くの実例を検索することができた。

表2. 「をVNだ」「をVN中」が初めの20件中出现した動名詞の語数

検索形式	語数
「をVNだ」	392 (83.7%)
「をVN中」	408 (87.2%)
全体	468 (100%)

すなわち、468 語の動名詞について、「を VN だ」「を VN 中」という形式を、「語順も含め完全一致」という検索オプションにより検索したところ、いずれの場合も 80% を超える動名詞について当該の形式を検索することができた。佐藤 (2011) においても、本調査においても、はじめの 20 件の中に当該の形式が出現するかどうかを調べたものであるために、「語順も含め完全一致」という検索オプションで調べた場合、この形式とは異なるものが全て排除されたことから、検索数が上がったと思われる。表 2 には示していないが、「を VN だ」と「を VN 中」の両方の形式に現れた動名詞は、363 語であった。これは、全体 (468 語) のうち 77.6% であり、「を VN だ」の形式で現れた動名詞 (392 語) のうちの 92.6% が「を VN 中」としても現れており、「を VN 中」の形式で現れた動名詞 (408 語) のうち 89.0% が「を VN だ」の形式で現れていた。すなわち、「を VN だ」と「を VN 中」に現れる動名詞は大多数が同じものであったと言えよう。

表 3 は、佐藤 (2011) における検索数である。

表 3. 佐藤 (2011) において初めの 20 件中に当該形式が出現した動名詞の語数

検索形式	語数
「を VN だ」	125 (36.4%)
「を VN か」	190 (40.3%)
「を VN だ」 / 「を VN か」	236 (50.0%)
「を VN 中」	263 (55.7%)
全体	472 (100%)

「を VN だ」形式で現れた動名詞の語数は、本調査においては 392 語 (83.7%) であったが、佐藤 (2011) においては 125 語 (36.4%) であった。佐藤 (2011) においては、4 分の 1 ほどしか当該形式が出てこなかったことから、コンピュータがゼロ形式で出ていると思われる「を VN か」という形式における出現数も調べた。その結果、472 語の動名詞のうち「を VN だ」と「を VN か」のどちらかの形式として (場合によっては両方の形式として) 現れた動名詞を合計して 236 語 (50.0%) とし、二形式合わせて初めて「を VN 中」の件数 (263 語, 55.7%) に近くなった。これに対して、本調査においては、「を VN か」形式の検索数を考慮せずとも、「を VN だ」形式のみの出現数でも、8 割を超え、「を VN 中」と近い割合となったことから、「を VN だ」形式は「を VN 中」形式と同じように使われる形式であり、決して希少な形式でないということが確認できた。

久保田 (2010) は、ヲ格をとる VN 構文を「ニュース報道で特徴的に観察される見出し的な表現」(p.105) と述べていた。確かに、見出し的な表現として現れることが多いことは否めないが、(31) (32) のように、(ニュースキャスターが)「ニュース報道で特徴的に観察される見出し的な表現」とは思えないような用法も決して少なくはなかった。

(31) 軽い気持ちで奨学金借りて卒業してから借金返済の辛さを実感だよな？

(unkar.org/r/news/1224373346、2011 年 9 月 16 日)

(32) まず、戦法として、底に網を着けずに中層以上に泳いでいる魚を採集だ。ゆっくり

と網を引くと、大量のオトシンが網に入った。

(www.jpc-co.jp/aqua/collection-travel.../saisyuryokou_009.htm, 2011年10月3日)

5. 終わりに

本論文においては、Google 検索の検索オプションの設定を操作することによって、佐藤 (2011) の再調査を行った。今回は、ネット上から、検索オプションにおいて「語順も含め完全一致」のテキストを検索し、サンプルの動名詞のどのぐらいが、「を VN だ」(ヲ格をともなう VN ダ構文)、「を VN 中」の形式で現れるかを探った。初めの 20 件に当該形式があった場合、当該形式が存在する動名詞とし、初めの 20 件に当該形式がなかった場合、当該形式が存在しない動名詞と分類した。その結果、本調査においては、468 語の動名詞中の 83.7% (392 語) がヲ格をともなう VN ダ構文として現れることが確認できた。一方、現在までの先行研究において広く動名詞構文の一つとして認められている「を VN 中」の構文に関しては、468 語のうち 87.2% (408 語) が当該形式で現れることが確認された。どちらの形式も 80% 以上の割合で出現し、ヲ格をともなう VN ダ構文も、「を VN 中」構文と同じぐらいひろく使用されている構文であることが認められた。佐藤 (2011) においても両構文の存在が一定の割合で存在することが認められたが、今回は、検索オプションを操作することにより、より正確な割合を得られたと思う。

本論文は、ヲ格をともなう VN ダ構文の実際の使用を確認するもので、その統語・形態的な特徴については考察することはなかった。久保田 (2010) が述べているように、VN ダ構文はアスペクト・テンス・モダリティ等において、VN スル構文と比べて制限があり、また、(27) の例文により指摘されたように、VN ダ構文は他動詞的な動名詞が、受動文とも思われる構文を形成する場合もある。その他、ヲ格がなぜ付与されるかという問題も説明する必要がある。以上の問題についてさらに追及すべきであるが、これらの問題については稿を改めて論じたい。

注

- (1) 動名詞の統語的カテゴリーに関しては、先行研究において議論があるもので、名詞であると認める (Sato 1993; Saito & Hoshi 2000 等) 考えのほか、動詞であるという立場 (Hasegawa 1991; Takahashi 2000) のほか、その他のカテゴリーであると考える立場 (影山 1993) 等、様々である。本論文においては、動名詞は名詞であると考察して議論する。
- (2) VN ダ構文において、動名詞にノ格による修飾があるかどうかで表す事象に違いが出てくるという益岡 (2000) が指摘した点は、Sato (1993a) と類似点があり、興味深い。すなわち、Sato (1993a) は、VN スル構文において、「ジョンが太郎に借金の返済さえした」の「借金の」のように、本来ヲ格で現れる項が(「ジョンが太郎に借金を返済さえした」)ノ格により動名詞を修飾している場合、そのノ格の成分(「借金の」)は動名詞の項ではないと議論としている。
- (3) Sato (2000) および Sato & Yamashita (2006) は、音韻的にゼロのコピュラが軽動詞(「する」)と同じように機能していると主張している。

参考文献

- 相澤正夫 (1993) 「日本語教育のための基本語彙調査と複合サ変動詞」『国立国語研究所報告 105 研究報告集 14』 pp.281-332, 国立国語研究所
- 大島資生 (2010) 『日本語連体修飾節構造の研究』 ひつじ書房
- 奥津敬一郎 (1978) 『「ボクハ ウナギダ」の文法—ダとノー—』 くろしお出版
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房
- 久保田一充 (2010) 「『VN ダ』文の機能—『VN スル』文との比較を通して—」『日本言語学会大会予稿集』 141, pp.104-109, 日本言語学会
- 久野暲 (1973) 『日本文法研究』 大修館書店
- 工藤真由美 (2002) 「現象と本質—方言の文法と標準の文法—」『日本語文法』 2 巻 2 号, pp. 46-61.
- 国立国語研究所 (1964) 『分類語彙表』 (国立国語研究所資料 6) 秀英出版
- 国立国語研究所 (1984) 『日本語教育のための基本語彙調査』 (国立国語研究所報告 78) 秀英出版
- 佐藤豊 (2011) 『「を VN だ」構文の出現頻度について』『ICU 日本語教育研究』 7, pp.55-64, 国際基督教大学, 日本語教育研究センター
- 杉岡洋子 (2009) 『「—中」の多義性—時間を表す接辞をめぐる考察—』 由本陽子・岸本秀樹編 『語彙の意味と文法』 pp. 85-104, くろしお出版
- 鈴木智美 (2010) 「ニュース報道における『動名詞 (VN) / 名詞 (N) + です』文について—『現地を緊急取材です』『老舗料亭に問題発覚です』—」『留学生日本語教育センター論集』 36, pp.57-70, 東京外国語大学
- 高橋太郎 (1984) 「名詞述語文における主語と述語の意味的な関係」『日本語学』 3-12, pp.18-39
- 仁田義雄 (1980) 『語彙論的統語論』 明治書院
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』 くろしお出版
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説—』 くろしお出版
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』 くろしお出版
- 益岡隆志 (2008) 「叙述類型論に向けて」 益岡隆志編 『叙述類型論』 pp.3-18, くろしお出版
- Grimshaw, J. & Mester, A. (1988). Light verbs and theta-marking, *Linguistic Inquiry* 19, 205-232.
- Hasegawa, N. (1991). On head movement in Japanese: The case of verbal nouns, *Proceedings of Sophia Linguistic Society* 6, 8-32.
- Hoshi, H. (1994). Passive, Causative, and Light Verbs: A Study on Theta Role Assignment. Doctoral dissertation, University of Connecticut, Storrs, Connecticut.
- Iida, M. (1987). Case assignment by Nominals in Japanese. In M. Iida, S. Wechsler, & D. Zec, eds., *Working Papers in Grammatical Theory and Discourse Structure: Interactions of Morphology, Syntax, and Discourse* (pp. 93-138). Stanford: CSLI.
- Ivana, A. & Sakai, H. (2007). Honorification and light verbs in Japanese, *Journal of East*

Asian Languages 16, 171-191.

- Iwasaki, Y. (1999). Three Subcategories of Nouns in Japanese. Doctoral dissertation, University of Illinois at Urbana-Champaign.
- Manning, C. (1993). Analyzing the verbal noun: Internal and external constraints. In S. Choi, ed., *Japanese/Korean Linguistics*, vol. 3 (pp. 236-253). Stanford: CSLI.
- Martin, S. (1975). *A Reference Grammar of Japanese*. New Haven: Yale University Press.
- Matsumoto, Y. (1996). *Complex Predicates in Japanese: A Syntactic and Semantic Study of the Notion 'Word.'* Stanford: CSLI.
- Miyagawa, S. (1991). Case realization and scrambling. Manuscript, Ohio State University.
- Miyamoto, T. (1999). *The Light Verb Construction in Japanese: The Role of the Verbal Noun*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Ohara, M. (2000). An analysis of verbal nouns in Japanese. Doctoral dissertation, University of Essex.
- Ohta, K. (1994). Verbal Nouns in Japanese. Doctoral dissertation, University of California, Los Angeles.
- Saito, M., & Hoshi, H. (2000). Japanese light verb constructions and the minimalist program. In R. Martin, D. Michaels, & J. Uriagereka, eds., *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik* (pp. 261-295). Cambridge, MA: MIT Press.
- Sato, Y. (1993a). Argument transfer-all or nothing, *Gengo Kenkyu* 104, 92-127.
- Sato, Y. (1993b). Complex predicate formation with verbal nouns in Japanese and Korean: Argument transfer at LF. Doctoral dissertation, University of Hawaii at Manoa.
- Sato, Y. (2000). Some evidence for a zero light verb in Japanese. In M. Nakayama & C. Quinn, eds., *Japanese/Korean Linguistics*, Volume 9 (pp. 365-378). Stanford: CSLI.
- Sato, Y. (2008). A phonologically null copula functioning as a light verb in Japanese. In M. Endo Hudson, S.-A. Jun, P. Sells, P. Clancy, S. Iwasaki, & S.-O. Sohn, eds., *Japanese/Korean Linguistics*, Volume 13 (pp. 207-217). Stanford: CSLI.
- Sato, Y. & Yamashita, Y. (2006) The acquisition of verbal nouns. In M. Nakayama, R. Mazuka, & Y. Shrai, eds., *The Handbook of East Asian Psycholinguistics, Volume II: Japanese* (pp. 62-68). New York: Cambridge University Press.
- Sells, P. (1996). Morphological expression and ordering in Korean and Japanese. *Language Research* 32: 601-620.
- Shibatani, M. & Kageyama, T. (1988). Word formation in a modular theory of grammar: postsyntactic compounds in Japanese, *Language* 63, 451-484.
- Takahashi, M. (2000). The Syntax and Morphology of Japanese Verbal Nouns. Doctoral dissertation, University of Massachusetts at Amherst.
- Terada, M. (1990). Incorporation and Argument Structure in Japanese. Doctoral dissertation, University of Massachusetts.

The actual frequency of the *o*-VN-*da* construction: A replication of Sato 2011

Yutaka SATO

This paper investigated the actual use of a Japanese construction with a verbal noun (VN), using the Google search engine. The construction investigated consists of a Japanese verbal noun followed by a copula and co-occurring with its Theme in the accusative, i.e., the *o*-VN-*da* construction. This is a replication of Sato (2011). This paper differs from Sato's (2011) method in that it used Google's Advanced Search and confined the expressions to what was exactly matching ('Find web pages that have this exact wording or phrase'). The verbal nouns in the carrier frame of '*o* VN *da*' (that is, the verbal noun in question preceded by an accusative marker and followed by the copula *da*) were searched for and, if there were any web pages that contained the expression in question within the first 20 results, the verbal noun in question was designated as 'used'. If the expression in question did not appear in the first 20 results, the verbal noun in question was designated as 'not used.' Of the sample of 468 verbal nouns, 392 verbal nouns (83.7%) were confirmed as 'used.' This figure was close to the occurrence of the construction with a VN followed by *-tyuu* 'during' and co-occurring with its Theme in the accusative, i.e., the *o*-VN-*tyuu* construction, a construction widely accepted in the literature. There were 408 verbal nouns (87.2%) found 'used' in this *o*-VN-*tyuu* construction. This shows that the *o*-VN-*da* construction is equally as frequently used as the *o*-VN-*tyuu* construction and is by no means a marginal expression in Japanese.